

<医学チーム>

はじめに

医学チームリーダー 北村 聖（東京大学）

文部科学省先導的大学改革推進委託事業「医学・歯学教育の改善・充実に関する調査研究」班は昨年度はモデル・コア・カリキュラムの改訂作業に集中し、昨年度末に第3次改訂とあってよい大きな改訂を成し遂げることができた。これを受けて、平成23年度の活動目標は、新しいモデル・コア・カリキュラムでも強く謳われている臨床実習の参加型への転換を支援することを目標とした。

わが国の医学部は附属病院の設置が義務付けられており、医師の養成課程において、病院における臨床実習は必要不可欠のものとなっているが、その実態については医科大学・医学部や診療科により期間や方法もまちまちであり、医学教育の改善のために臨床実習の充実の必要性がかねてより叫ばれていた。今回、モデル・コア・カリキュラムの改訂に伴い、診療参加型臨床実習に移行する希望のある大学が多いと思われ、この調査研究班の活動として、大学が診療参加型臨床実習を取り入れようとした際に、支援となるものを心掛けた。

医学教育の改善と臨床実習の充実に関してのこれまでの経緯について簡単に述べる。

平成7年11月に文部科学省に「21世紀医学・医療懇談会」が設置され、平成11年4月に第4次報告として、「21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して」という提言が公表された。その中の、学部教育の改善の項に「少人数教育の推進と臨床実習の充実」が提言された。より具体的には「学生に対し、専門的な知識にとどまらず、患者、家族や他の医療人とのコミュニケーションの在り方を含む医師・歯科医師としての実践的な臨床能力や態度を体得させるためには、実際の医療の場における臨床実習の一層の充実を図ることが重要である。このため、クリニカル・クラークシップ（学生が病棟に所属し、医療チームの一員として、実際に患者の診療に携わるような臨床実習の形態）と呼ばれる臨床実習の実施、地域の医療機関の臨床経験豊かな人材に学生の教育に協力していただく「臨床教授」制度の導入、大学病院と地域の医療機関との連携による学外実習の実施等を引き続き推進することが必要である」と診療参加型臨床実習の推進が明記されたが、その後のその他の改革に比べ臨床実習の改革は歩みの遅いものであった。

先の提言を踏まえ、平成13年3月に医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議報告「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について - 学部

教育の再構築のために -」において「診療参加型臨床実習の実施のために」が述べられ、また、この報告書の別冊にはモデル・コア・カリキュラムに加え、「診療参加型臨床実習の実施のためのガイドライン」が示されている。

平成 18 年 11 月の「医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議第一次報告」ではモデル・コア・カリキュラムの改訂に関する論点整理に加え、臨床実習に関しては「新医師臨床研修との整合性・接続性・役割分担を踏まえた臨床実習の在り方」として最終報告に向けた検討課題とされた。それに引き続く平成 19 年 3 月の最終報告では、「診療参加型臨床実習の在り方」という大項目が設けられ、その中で、①「地域医療臨床実習」の学習内容の新設（モデル・コア・カリキュラム改訂）、②患者の理解と同意を得るための取組（学生の診療技能の修得に関する証明書の発行など）、③侵襲的医行為等に関するプロセス（診療技能の確保、患者への説明と同意等）の徹底、④個人情報に関する学習や指導の徹底、⑤全学的な実施体制（診療科横断的な体制、統括責任者・実習委員会の設置など）、⑥学外の医療機関での実習の推進（臨床教授の活用など）、⑦実習終了時、卒業時の評価・指導の充実（到達目標等の明確化、advanced OSCE の実施など）の 7 項目が提言された。本報告書は基本的にはこの最終報告書に基づくものであると位置づけられる。

さらに、平成 21 年 5 月の医学教育カリキュラム検討会意見のとりまとめ「臨床研修制度の見直し等を踏まえた医学教育の改善について」では「基本的診療能力の確実な習得と将来のキャリアの明確化」の項において、方向性として「臨床実習を系統的・体系的に充実させ、診療チームの一員として、患者に接し、診断・治療の判断ができる基本的な能力や医療人としての基本的姿勢を確実に身に付けるとともに、自らの将来のキャリアを明確に見通すことができるようにする」と明記され、診療参加型臨床実習へ移行を強く推奨している。

時を同じくして、米国 ECFMG（外国医学部卒業生のための教育委員会）が、2023 年より国際的な認証を受けた医科大学・医学部の卒業生にのみ受験資格を与えると 2010 年 9 月に発表したことにより、国際的な標準である診療参加型臨床実習へ本邦の多くの大学が志向していることも、日本の臨床実習の改善に向けた追い風になっていることも否めない。

このように 10 数年にわたり、繰り返し診療参加型臨床実習の必要性が提言されているにもかかわらず、いまだ十分には浸透していない現実があり、実際に学部教育を担う教員を直接サポートする必要を切に感じたうえで、今年度の班会議が進められ、ここに成果物として、診療参加型臨床実習の充実に役立つものを公表することができたと自負している。

本報告書（医学チーム）は全部で 7 章からなっている。

第1章 文部科学省 WS アンケート結果では、平成22年度ならびに23年度の文部科学省主催の「医学・歯学教育指導者ワークショップ」の事前調査のアンケートを収載した。ワークショップでの議論に使うことが主目的であるが、非常に有用な資料と考えここに収載した。アンケート結果に関する判断や解析は全く行わずに、結果のみを収載した。

第2章 薬剤師・看護師養成における診療参加型臨床実習では、医師・歯科医師以外の職種でも患者の同意など同じような課題を持っていることが推定され、簡素なものではあるが、実情を紹介した。薬剤師の部分は西弘高協力者と神戸学院大学内海美保氏が、看護師の部分は嶋森好子委員と、慶応義塾大学小池智子氏が主に執筆した。

第3章 診療参加型臨床実習実施の充実に向けての提言 平成23年度版は、本報告書の中でも中心をなすものであり、各大学において診療参加型臨床実習をより充実するうえでぜひとも参考にさせていただきたい。吉田素文協力者が素案を主に執筆し、委員全員で検討を加えた。

第4章 診療参加型臨床実習等における経験と評価の記録 案(例示)は、臨床実習の際に、学生が携帯するいわゆる手帳・ファイルをイメージし、教育担当者がそれを作成するうえで参考になるものを心掛けた。各大学の自主的判断で個性豊かなものを作っていただきたいと願っている。特に学生が行う侵襲的な医行為等は各大学で十分な議論をしたうえで決定されたい。素案は、錦織宏、古屋彩夏、井上玄の各委員が熱心な議論のうえで作ったものである。

第5章 DVD 映像で見る診療参加型臨床実習とは、百聞は一見にしかずということで、理想的な参加型臨床実習の場면을映像で提供することとした。シンポジウムでの試写の感想では、当該臨床実習場面の体制や学生の受け応え等が出来すぎるのではないかという感想が多く、米国ではこのように行われるとはいえず、これはあくまでも理想像に近いことを改めて強調したい。このDVDを学内FDやその他オリエンテーションなどの場面で使っていただき、より充実した診療参加型臨床実習になることを願っている。主には大滝純司委員、高田和生協力者が担当し、東京医科歯科大学はじめ多くの関係者にご協力いただいた。

第6章 医学部の海外調査は、オランダ王国、英国の臨床実習とその周辺状況の調査報告である。多忙な中、調査に協力していただいた関係者に感謝する。

第7章 シンポジウム「参加型臨床実習をめぐって」は、本報告書の骨子ができた平成23年12月に東京大学で行ったシンポジウムの資料を収載した。きわめて活発な議論があり、本報告書の作成に大きく寄与した。

最後に、今回の調査研究にご協力いただいた全国の医科大学・医学部の関係者をはじめ、多くの皆さんに、この場を借りて深謝申し上げる。

用語について：

診療参加型臨床実習：米国流にクリニカル・クラークシップと呼ばれたり、単に参加型臨床実習と呼ばれるが、本報告では診療参加型臨床実習と記載する。

臨床実習後 OSCE：Advanced OSCE と呼ばれることも多いが、和製英語で海外では通じないため、敢えて臨床実習後 OSCE と記載した。時期が限定されるため、卒業前 OSCE も避けた。米国で、ECFMG では CSA (Clinical Skills Assessment) と言われ、また、CPX (clinical performance examination) という名称もクラークシップ後臨床スキル評価で用いられている。

経験と評価の記録：ログブックやポートフォリオなどとも呼ばれるが、内容が明らかになるように日本語にした。

簡易版臨床能力評価法：mini-CEX: mini-Clinical Evaluation eXercise と呼ばれているものをこのように表記した。臨床実習や臨床研修で行われる観察評価法の一つである。(P.130 参照)

研究組織

- 新井 誠人 文部科学省高等教育局医学教育課技術参与
 石田 達樹 社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 事業部長
 井上 玄 千葉大学大学院医学研究院 助教
 大滝 純司 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学教育推進センター 教授
 ○北村 聖 東京大学医学教育国際協力研究センター 教授
 鯉淵 典之 群馬大学大学院医学系研究科 教授
 後藤 英司 横浜市立大学大学院医学研究科 教授
 小林 直人 愛媛大学大学院医学系研究科 教授
 嶋森 好子 社団法人東京都看護協会 会長
 田中 雄二郎 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 教授
 田邊 政裕 千葉大学医学部総合医療教育研修センター 教授
 奈良 信雄 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター長・教授
 錦織 宏 京都大学大学院 医学研究科医学教育推進センター 准教授
 平出 敦 近畿大学医学部救急医学講座 主任教授
 古屋 彩夏 JR 東京総合病院小児科 医長

【オブザーバー】

- 福田 康一郎 社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 副理事長
 名川 弘一 独立行政法人労働者健康福祉機構 理事長

【班協力者】

- 大西 弘高 東京大学医学教育国際協力研究センター 講師
 高田 和生 東京医科歯科大学膠原病・リウマチ内科 准教授
 福島 統 東京慈恵会医科大学教育センターセンター長・教授
 吉田 素文 九州大学医学部医学教育学講座 教授
 西城 卓也 岐阜大学医学部医学教育開発研究センター 助教

(○ : リーダー)

※所属は本報告書発行（2012年3月）時点のものとなっております。

調査研究チームにおける活動状況

《医学チーム 「調査研究委員会」の開催状況》

平成23年7月6日 調査研究委員会（第1回）

今年度取り組む課題、全国医学部における臨床実習の実態調査、諸外国の臨床実習の調査、他職種の臨床実習の調査、臨床実習の評価の在り方、臨床実習手帳・ポートフォリオ*の提案、その他

9月30日 調査研究委員会（第2回）

ログブック*の作成、全国医学部における臨床実習の実態調査、アンケート調査結果、諸外国の臨床実習の調査、診療参加型臨床実習の実施のためのガイドライン**、シンポジウム開催、その他

12月9日 調査研究委員会（第3回）

シンポジウム、ログブック*の名称、DVDについて、平成23年度版報告書、その他

平成24年2月3日 調査研究委員会（第4回）

報告書最終確認、診療参加型臨床実習の実施のためのガイドライン**、DVD試写、その他

*「臨床実習手帳」「ポートフォリオ」「ログブック」の名称は議論の結果「診療参加型臨床実習等における経験と評価の記録 案（例示）」とすることにした。

**「診療参加型臨床実習の実施のためのガイドライン」は議論の結果「診療参加型臨床実習の充実に向けての提言 平成23年度版」とすることにした。

《上記以外の開催状況》

平成23年7月9日 文部科学省打合せ 宮園浩平・門脇孝・國土典宏・栗原裕基・黒川峰夫・錦織宏・北村聖 （東京大学）

8月3日 DVD参考映像に関するミーティング 田中雄二郎・北村聖 （東京医科歯科大学）

8月9日 DVD参考映像に関するミーティング 田中雄二郎・大滝純司 （東京医科歯科大学）

9月20日～23日 全国医科大学のシラバス調査・打合せ・アンケート集計・報告書

作成など

吉田素文・菊川誠・武富貴久子・吉田友紀・大西弘高・北村聖 (東京大学)

9月23日 ログブック*ミーティング 錦織宏・井上玄・古屋彩夏 (東京大学)

9月26日 ログブック*ミーティング、DVD撮影に関するミーティング 田中雄二郎・大滝純司・高田和生 (東京医科歯科大学)

10月5日 DVD撮影に関するミーティング 田中雄二郎・大滝純司・高田和生 (東京医科歯科大学)

10月6日 文部科学省打合せ 北村聖 (文部科学省)

10月16日～19日 オランダ王国訪問 錦織宏 (ユトレヒト大学他)

10月29日 DVD撮影 田中雄二郎・大滝純司・高田和生・加藤陽子・山口和哉・岡崎眸・吉松薫・山下基・森泰葉・北村聖 (東京医科歯科大学)

11月1日～6日 英国訪問 福島統・北村聖 (キングス大学他)

11月14日 ログブック*ミーティング 錦織宏・井上玄・古屋彩夏 (東京大学)

12月2日 シンポジウム「参加型臨床実習をめぐって」開催 (東京大学)

12月7日 DVD再撮影の打合せ 高田和生・大滝純司 (東京医科歯科大学)

12月12日～16日 英国訪問 福島統 (キングス大学他)

12月20日 DVD再撮影 高田和生・加藤陽子 他 (東京医科歯科大学)

12月26日 ログブック*ミーティング 錦織宏・井上玄・古屋彩夏 (東京大学)

平成24年1月12日 文部科学省打合せ 福田康一郎・江藤一洋・大原里子・北村聖 (文部科学省)

*「臨床実習手帳」「ポートフォリオ」「ログブック」の名称は議論の結果「診療参加型臨床実習等における経験と評価の記録 案(例示)」とすることにした。

その他、随時、メールリストで議論

